撫下る也、るをれといふは活用ことばなり、山にもいふ也、こゝには雪頽（ゆきくづる）の字を借て用ふ、字書に頽は暴風ともあれば、よく叶へるにや、さて雪頽は雪吹に雙て、雪國の難義とす、高山の雪は里よりも深く凍るも、又里よりは甚し、我國東南の山々里にちかきも、雪一丈四五尺なるは淺しとす、此雪こほりて岩のごとくなるもの、二月のころにいたれば、陽氣地中より蒸て解んとする時、地氣と天氣との爲に破て響をなす、一片破て片々破る、其ひゞき大木を折がごとし、これ雪頽んとするの萌也、山の地勢と日の照すとによりて、なだるゝ處と、なだれざる處あり、なだるゝはかならず二月にあり、里人はその時を去り、處を去り、萌を知るゆゑに、なだれのために擊死するもの稀也、去かれども天の氣候不意にして一定ならざれば、雪頽の下に身を粉に碎もあり、雪頽の形勢いかんとなれば、なだれんとする雪の凍、その大なるは十間以上、小なるも九尺五尺にあまる、大小數百千悉く方をなして、削りたてたるごとくす事、下に辨ず、なるもの、幾千丈の山の上より一度に崩頽る、その響百千の雷をなし、大木を折、大石を倒す、此時はかならず暴風力をそへて、粉に碎たる沙礫のごとき雪を飛せ、白日も暗夜の如く、その慄しき事、筆紙に盡しがたし、

〔北越雪譜 初編 中〕ほふら　我鹽澤の方言に、ほふらといふは、雪頽に似て非なるもの也、十二月の前後にあるもの也、高山の雪深く積りて凍たる上へ、猶雪ふかく降り重り、時の氣運によりて、いまだこほらで沫々しきが、山の頂の大木につもりたる雪、風などの爲に一塊り枝よりおちしが、山の聳に隨ひて轉び下りまろびながら、雪を丸（まろめ）て次第に大をなし、幾萬斤の重きをなしたるもの、幾丈の大石を轉し走がごとく、これが爲に、あわ〳〵しき雪おしせかれて、雪の洪波をなして、大木を根こぎになし、大石をもおしおとし、人家をもおし潰す事去ば〳〵あり、此時はかならず暴風雪を吹きちらし、凍雲空に布て、白晝も立地に暗夜となる事、雪頽におなじ、なだれは前にもいへるごとく、すこしはその去るしもあれば、それと去るめれど、此ほふらはおとづれもなくて